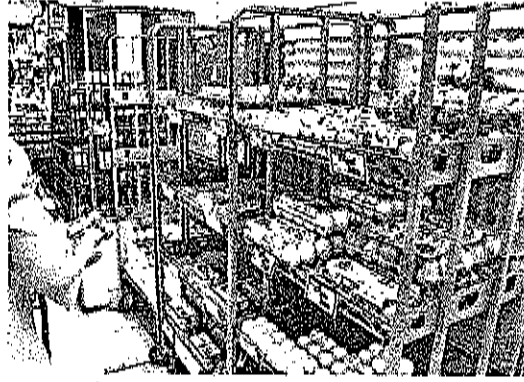


県内の卵 異次元の高騰

卸売価格

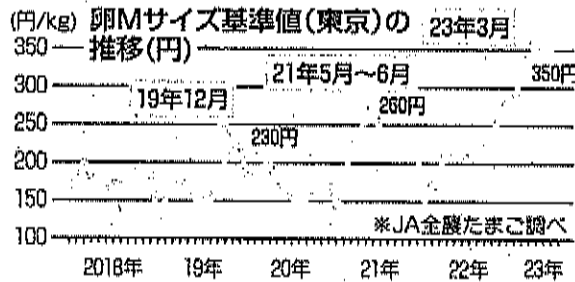


価格変動が小さく「物価の優等生」と呼ばれた卵が、異次元の高騰を見せている。JA全農たまごが発表する五月の卸売価格（東京、Mサイズ基準値）は月平均で一*。当たり三百五十円と、比較可能な一九九三（平成五）年以降の最高水準を四月月連続で維持したままだ。じわじわと家計を苦しめ続ける状況に県民からは悲鳴が上がる。（谷出知謙、藤井雄次、金崎千花）

ずりりと並ぶ価格高騰している卵。福井市のAコープやしろ店で

4カ月連続で 最高水準維持

ずりりと並ぶ卵はスーパーでの見慣れた光景。ただ一点、導つのがその価格だ。十個入りパックの卵は三百円をゆうに超える。それでも買い物客は、食卓に欠かせない食材として迷わず購入していく。県内に七店舗ある食品スーパー「Aコープ」。福井市洲子二丁目のある店の担当者は「二、三月は入荷が不安定になるくらい。今は落ち着いたけ



ど、経験したことがない高騰です」と口にする。価格高騰の理由は昨秋からの鳥インフルエンザ感染拡大による供給減少と、養鶏場の飼育コストの高騰。

家計にずしり 県民悲鳴

飼料、光熱費ともに支出がかさみ、業界関係者は「家々の鶏を飼って卵を産ませる手法を養鶏家が自棄しており、すくなくとも状況」と話す。JA全農たまごによると、十六日の卸売価格（東京、Mサイズ基準値）は昨年同日の一・七倍となる三百五十円。例年夏にかけて相場は下がるが、「鶏の数が少なく、二百円台にはまだまだ届かない」（関係者）との見通しを示す。

影響を受けるのが飲食店だ。越前市役所一階に出店する「P's cafe KH A N A A」(ピース・カフェ・カーナ)は、地元食材にこだわって越前市北日野地区産などの卵を使った「北日野厚焼き玉子サンド」が人気メニュー。だが地元産の卵が高騰して採算が合わなくなり、現在は他産地の卵を代用している。店主は以前は卵三個を一人前で使っていたが、今は一個にして

何とかしのいでいる」と、苦しい胸の内を明かす。

永平寺町の会社員、南部智子さん(66)は、高校一年生の次男の弁当や朝食などで、毎日三個以上の卵を使う。「料理によっては一日に五個以上使うことも。欠かせない食材だから、購入頻度を減らすわけにもいかない。高いのは困るけど仕方ない」とあきらめ顔。長引く価格高騰に「当初は価格を見るたびに驚いていたが、今では慣れてしまった。これ以上、上がったら使の方を見直さないとけないかも」と首を落とした。